誌上行学講習会

高佐日煌上人

「また一機能は他の機能に代ることは出来ない」
眼はあくまでも眼であって、眼がそのまゝ耳の代理は出来ない。そういう意味であります。
「盲人の感覚は触覚、臭覚、歩巾に依る総合判断と、第九識の霊感に依つて之を補うものである」
めくらの人は大変感が良い。しかしこれは眼が見えないから他の方の機能が代理をして働らいているわけではない。人を区別するのは臭覚、ものを知るには、なでまわす触覚、場所を知るのは歩巾による。これらを合わせ使い、同時に第九識の霊感によって判断しているもので、単なる代理機能によっているのではない。
「知覚識の意義は、是れ無くして生命体の運営が出来ない所にある。釈迦牟尼仏が一切とは何ぞやに答えて、『六根六境なり』とせられたのは、迦いに理由のあることである。」知覚がなければ生きて行くことが難かしくなる。生命の営みようがない。生きて行けない。お釈迦さまが一切とは何ぞやに答えて、「六根六境なり」とせられた。一切とは眼で見るすべて、その型色、耳で聞くところの音声、音響のすべて、鼻で臭をかぐものの、すべて、舌で味わうものゝすべて、体で感ずるすべて、それらが一切であると申されたのはたしかに真理であります。この外には全く一切は無いのであります。あるとするのは自分の意識だけであります。
これほど左様に五官は、我々が生命を営む上に最も大事な道具なのであります。しかし間違えてならないことは五官はあくまで道具であるという点であります。五官が生命であるわけではない。こゝに気が狂った人が居るとする。狂人です。気が狂っていても五官はちゃんとある。眼は見える。鼻はかげる。耳も聞こえる。しかし本体が気が狂っていれば五官はそのまゝ廃物になってしまう。ですから五官は大切な生命の営みを助けているがその根本には心があり、心と五官とによって生きているのが真実なのであります。

（以下次号）

お題目で成仏するI

仏教の目的は、成仏することです。お釈迦様は、二千五百年前に、人生の生老病死の苦しみと弱肉強食の生命の無常を感じ、人生の安楽を求め出家しました。具体的には四苦、八苦という苦しみに満ちた生存のあり方を逃れ、永遠の無苦安穏の生命に入るため輪廻転生を解脱し、もう二度と娑婆世界にも戻らないようにすることが目的でした。
人類は宇宙の根源意識（妙法）から分裂し個の意識を持ちました。根源意識は、個であることの孤独感から他者を求めました。他者存在との関わりから意識の進化を目指しました。宇宙の顕現それは妙法の一念から三千の事象が顕現したのです。宇宙顕現のプロセスを語ると、意識たのであった。根源意識は、物質世界を顕現し、意識だけの存在する主体（釈迦如来）客体（多宝如来）にわかれ、光を発し明暗を分けました。物質世界は地、水、火、風と言ったエレメントに分かれ、鉱物、植物、魚類、動物、霊長類のように発展してゆきました。
人類の魂は物質世界の体験経験を通し、個の意識を深化、発展させるため、また宇宙意識の光を地上にもたらすため受肉しました。受肉とは地上で進化していった類人猿のような存在の肉体に入り込んだことを言います。
それは根源意識の意志を地上に実現するためでもありました。根源意識は地上において肉体の五感を通し、遊び、苦労し、喜び経験を積もうとしたのです。地上は、競技場であり、個々の根源意識から分裂した魂達の、楽土であり、プレイランドであり、経験学習の場を目指したものだったのです。
しかし、物質界は無常です、人類の肉体は有限であり、とは食欲を持たせ栄養を取り、睡眠欲を持たせ休息させなければなりません。また使用期限の過ぎた老いた肉体は再生出来ませんので性欲を持たせ新しい魂の乗り船である肉体を赤ちゃんとして出産せねば成りませんでした。
こうして、生まれ変わることによって魂は、地上での生を繰り返し体験できるようになりました。